

人間の理解と差別

松 田 高 志

(1)

どのようなものであれ、それが全体として何であるかは、それほど自明なことではないであろう。目の前に石ころがあるとして、それが石であり、重いか軽いかわ、どのような成分のものかは一応分るかもしれない。しかし例えば、それを絵に画くならば、百人百通りの絵が出来上るであろう。それは、ただ画く者の主観が百通りあるというだけのことでなく、その石ころそのものの味わいがそれほど複雑で奥深いということでもあろう。その石ころが何であるか、その味わいを含めた全体において規定することは不可能であるとも云える。種々の面は規定出来ても、その石ころそのものの全体は、芭蕉の「松のことは松に習え」のように、ただ虚心担懐にありのままに受けとろうとすることによって近づいていけるに過ぎない。

我々の認識は、確かに対象の何かをキャッチすることが出来るとしても、それが対象の全体をとらえているとはそう簡単には云えないのである。しかし我々は、実際には、「これは要するにこうだ」というように全体として分ったつもりになりやすい。我々の認識には、思い込みや決めつけのようなものが意外に多いのではないだろうか。何かに感動したり、新しいことを発見した時に、普段いかに物事を容易に断定しているか、又物事の意味や味わいが本来いかに深く豊かなものであるかに気づかされるのである。

ところで、このことは、認識作用そのものに伴う問題であるとも云える。何かあるものに向かう場合、全体として何かが分らなければそれに接することは

出来ないし、又その個々の部分の意味も分らない。従って、何より先ず対象の全体を把握しようとするが、それは当然十分な根拠のないものになりやすい。そのことは、認識のプロセスにおいてやむをえないとも云える。但し、認識作用として、同時に個々の部分において全体の意味を検証し、修正するという働きが無ければならないのであるが。

以上からすれば、全体把握は、常に流動的、相対的なものであると云わねばならない。しかし全体把握なしには認識が成立たないということから、十分な根拠のないまま、それを固定化し、絶対化するという傾向も生まれてくるのである。しかも日常生活において、それで一応支障がないとなれば、その認識は、そのまま正しいことになる。我々の生活において思い込みや決めつけが多い所以であろう。ともかく、先ず全体把握が必要であるということと全体把握はそう簡単ではないということとは、認識上の一つのジレンマであろう。ここで我々の出来ることは、認識を常に固定的、絶対的なものにせずに対象をより一層ありのままに受けとろうとし、又全体と部分との間の活発な検証、修正の循環作用を持続させることであろう。

(2)

ところで、以上述べたことは、人間を理解する場合、特に問題となるであろう。そしてその最大の問題は、「差別」であると云えよう。例えば、自分に対する他人の評価を知らされる時、確かにその通りだと思ったとしても、しかし自分は必ずしもそれだけではないと誰もが感じるのではないだろうか。しかし自分が他人を評価する時は、相手は要するにこうであるに違いないと断定することが多い。あの人は良い人だとか親切な人だと思うのは、ごく普通のことであるが、しかし自分が全体として良い人間であるとかそうでないとかは普通には云えないことである。これは、人間関係につきまとう厄介な問題の一つである。

他のものにおいてもそうであるが、とりわけ人間は輪郭づけの出来ない存在である。例えば、人間の個々の性格や能力も、規定出来ないのもであるとも云

える。誰もが気づいていなかったもの、そして又自分自身も気づいていなかったものが思いがけず現われ、発揮されるということがある。その際、発揮される迄は単なる可能性であって実際には存在していなかったとは単純には云えない。意識されているものより、意識されていないものの方がはるかに多いとも云われる。又云う迄もなく、人間は常に変化し、成長しうるものであり、又何といっても自分で自由に決断しうる存在である。しかしそのようないわば相対的な変化の面だけでなく、真実の自己に目覚めていくといういわゆる「己事究明」の方向も考えられる。それもまさに方向であって、これでよいということはない。そのことは、古来異口同音に言われていることである。ソクラテスにおいて、「汝自身を知れ」ということは、最も重要なモットーであるが、その際、「無知の知」こそ究極的な知なのである。

かくして、人をこうだと断定することは出来ないし、又出来ない以上すべきではないであろう。しかし、先に述べたように、我々は人を断定しがちであり、又自分をも断定しやすい。

「差別」は、本来優劣の比較出来ないもの、つまり全体としての人間を比較し、序列化ないし排除することである。優劣の比較出来るものをそのようにしても「差別」とは云わない。スポーツ競技やゲーム、各種のコンクールや試験で優劣が判定され、序列がつけられても、それは「差別」とは云わない。それは、全人格的評価とは関わりがないことが前提されているからである。しかし例えば性や民族性によって人間の等級化や排除が行なわれるならば、「差別」である。そこでは、本来比較出来ないものを比較しているのである。確かにその際、一定の面において、それも専ら統計的に比較することは出来るかもしれない。しかしそれは、あくまで一面的、部分的比較であって、いかなるものであれ全人格的評価とはなりえない。それにも拘らずその一面的評価によって人間の優劣を決めるならば、それは飛躍である。比較出来ないものを比較するとは、より厳密に言えば、一面的、部分的評価を全人格的評価へと「全体化」することである。「差別」とは、根拠のない全体把握を固定化、絶対化して優劣を決め

ることであるが、それは特定の尺度を「全体化」しているのである。このことは、先に述べた認識作用に伴う危険性によると共に様々なエゴイズムが介在することによって起こる問題であろう。

(3)

ところで、このような「全体化」が起りやすい状況というものも考えられる。例えば、戦争のように、目的ないし結果が最優先される事態においては、その目的の為に人々は、能力や貢献度に応じてはっきりと種別化され、序列化される。戦争において、第一に敵か味方か、又どちらに加担するかが峻別され、更に戦闘員とそうでないもの、そして戦闘にとって負担となるものが区別され、序列化される。その差異は、目的が絶対的になるに従って、全人的差異になる。おそらく戦争は、このような「全体化」の最も顕著な例であろう。無論、戦争が単に偶然的、一時的なものであれば、機能的分化はあってもそれほどこの「全体化」は見られないであろう。しかし逆に、仮に戦争状態でなくても、戦争への構えが強い社会では、この「全体化」の傾向も又強い。「差別」の問題と戦争（ないしは戦争への構えの強い社会）とは、極めて深い結びつきがあると云えよう。性差別の問題も、専ら男性が戦闘員であり、女性が非戦闘員であったことと深く結びついているように思われる。このことについては、又別の機会に考えたいと思う。

現在の我が国の社会は、戦争への構えをそれほど強く持っているとは云えないかもしれない。しかし経済競争社会として、それに極めて類似した構造を持っているように思われる。昔から、家庭生活が外的論理に全面的に従属するのは、戦時のような非常事態に限られていたであろう。それなしには、家庭生活そのものが危うくなったからである。しかし今の我が国の社会は、戦時のような非常事態ではないにも拘らず、外的論理、つまり経済、企業の論理に家庭生活が従属しているかのようなようである。つまり経済競争に対し、家庭生活はその犠牲となるべきであるかのようなようである。その限り、企業で働く者と家庭にいる

者との間に一種の序列化が起る。又当然、経済競争に有用な者とそうでない者との間に、又その「予備軍」の段階としての「進学競争」において序列化が起るのである。本来戦時のような非常事態においてしかありえないことが、社会全体に常態化していると云ってもよいであろう。これは、「もう一つの戦争」であるとも云えるが、ともかく実際の戦争と極めて類似した構造が見られるのである。

(4)

ところで、ここにおいて平和とは何かについて考えておく必要がある。

一般に平和については、戦争と比べてその知識やイメージは甚だ乏しいように思われる。それは、ちょうど病気については極めて多くの知識やイメージがあるが、健康についてはそうでないのと似ている。しかし健康も、決して単に一樣なものではなく、おそらく豊かな知識やイメージを持ちうる筈である。そして同じことがやはり平和についても云えるのではないだろうか。しかも健康について多くの知識やイメージを持つならば、より自覚的に健康増進に向かうことが出来、それはある意味で対症的医学以上に重要なことであるが、それと同じく、平和についても生き生きした知識やイメージを豊富に持ちうるならば、積極的に平和を創造していく動きが生まれ、それは、反戦、反核運動と共に、否それ以上に大きな意義を持つと思われる。

ともかく平和とは何かについて考える意義は大きいであろう。平和は、よく云われるように単に戦争がない状態ではない。例えば、M・ブーバーによれば、平和とは一言で云えば対話しうることである。対話が出来なくなれば、それは戦争、あるいは戦争に向かう状態である。又戦争中であっても、対話をしようとする動きが生じれば、それは平和に向かっているのである¹⁾。

対話は、互いに相手をありのままに受け入れることであり、しかも目に見え

1) Vgl. Martin Buber, Das echte Gespräch und die Möglichkeiten des Friedens, in: Nachlese (1965), S. 219ff.

ないものを含んだ存在全体において互いに信頼し、生かし合うことである。ここでは、互いの立場、役割、能力、性格等を越え、存在全体においてかけがえのない人格として触れ合い認め合うのである。話し合い、協議、議論のように、立場や役割や一定の条件のもとにおいて関わり合うのではない。

対話においては、儀礼的、形式的なことや見せかけ、あるいは隠しだてがあってはならないが、とりわけ何かの決めつけや固執があってはならない。つまり常に相手に対し、又自分に対し開かれたあり方でなければならない。従って、対話は、常に始まりであり、出来事である。新たに生まれることであり、変わっていくことである。対話において、沈黙が大切なのは、存在全体における出来事であるからだとも云えるが、又いわば常に原初的であるからでもあろう。

対話は、議論や話し合いと違って結論も結着もない。つまりはっきりとした輪郭や特定の事柄への限定というものがない。それがないということは、対話の不完全さではなくて、かえって以上に述べた対話の働きや特徴を可能にするものである²⁾。

ところで、平和も、戦争と比べるならば輪郭の乏しい漠然としたもののようなものである。平和が単に「戦争でない状態」というような消極的な見方がされやすい所以であろう。しかし対話においてそうであるように、輪郭づけや限定が出来ないということは、単に不完全さや不十分さを意味するものではなく、むしろ人間にとって極めて重要な意味を持っているのではないだろうか。そこでは目に見えない、規定出来ない人間の存在全体を信頼し、生かし合うということが出来るのである。ひとりひとりのかけがえの無さ、独自性が認められ、又あらかじめ規定出来ない人間の成長や生成が大切にされるのである。人と人之間も固定した仕切りや枠がないならば、互いにアカの他人同士ではなく、他人の苦しみは自分の苦しみであり、他人の喜びは自分の喜びであるとい

2) 拙稿「『対話』の構造と意義」(神戸女学院大学『論集』第79号所収) 参照。

う一体的、共感的生き方が出来る。それは、いわばいのちの自然な流れと云ってもよいであろう。いのちは、仕切りや枠によってさえぎられることなく広く自由に流れるほど生き生きしうるのである。

かくして平和は、限定がなく漠然としているようであるが、まさにそれ故に互いに助け合い、ありのままに生かし合う世界がどこまでも広がり、深まっていくことが出来るのである。但し、それでは捉えどころがないように思われるかもしれない。しかし例えば、目的や結果に固執する限り、それに至るプロセスを味わうことが出来ないが、目的や結果にとらわれなければそのプロセス全体を十分に味わうことが出来るのである。平和な生き方とは、一瞬一瞬を存分に味わいつつ生きることではないだろうか。味わいは、知的に規定出来ないからといって決してあいまいな認識ではなく、むしろ極めて繊細で確かなものであり、しかも物事の全体へと開かれ、その内奥に迫る認識である。

これに対し、戦争や競争は、既に述べたように常に輪郭づけや規定が必要である。輪郭づけが出来ないとか多義的であるということは、認められないことである。平時において、「疑わしきは罰せず」であるが、戦時においては、疑わしきは敢て断定し、罰するのである。従って、戦争や競争は、一義的に規定出来ないものを排除するか、あるいは強引に限定してしまう。割り切れないもの、形としてはっきり現われないもの、規格や基準に合わないもの、独自に成長し、変化していくものをそのあるがままに大事にし、あるいは育てていくこととはなく、外にはっきり現われた結果や特定の尺度で測ることが出来、評価出来るものだけを重視し、又そうでないものを無理にそのような尺度や規格にあてはめるのである。「差別」は、その典型に他ならないであろう。

ところで、又何らかの理由で、このように外に現われたものや単純に評価出来るものだけを重視する傾向が強くなれば、当然比較や競争が起り、又管理や支配のしやすい状況が生まれることになろう。ここに、厄介な悪循環が見られることになるが、このことに関してもう少し考えてみたい。

(5)

多くの人が指摘しているように、現代において著しく欠けており、それ故に又最も必要としているものは、生命への^{いのち}生命的関心や関わりであると云ってよいであろう。即ち、いのちの不思議さへの驚きや畏敬、その有難さやかけがえの無さへの厳肅な思い、その生成、変化や多様性あるいは全体としてのつながりやその調和への感動、又いのちへの親密感や愛情、信頼や一体感等である。これは、いずれも管理や操作、あるいは競争に結びつくような輪郭や規定性を持っていない。それは、受容や随順、共生やいわば対話のような関わり方である。つまり決めつけなしに対象の全体へと関わるあり方である。これは、いわゆる自然に対してだけでなく、我々の内なる自然としての身体、心身の全体を含めたいのち、又自然や人間全てを含んだ大自然、ないし大いなるいのちの全てに云えるであろう。

このようないのちへの関心や関わりは、云う迄もなく平和な世界を成立させる基本的あり方であろう。このようなあり方が大きな比重を占めれば占めるほど、その社会は競争や差別や支配がなく、個々の個性が自由に発揮され、豊かな交流が起る平和な社会になるであろう。しかしこのようないのちへの関心や関わりは、先に述べたように現代において著しく失われていると云わねばならない。それは、まさにはっきりした輪郭や規定性を持ちえないからであろうか。

とはいえ、いのちへの生命的関心や関わりを育て、深め広げていくことは決して難しいことではないであろう。というも、このような場や機会、我々の身近に充分あり、又何よりも我々はこのようなものを本来的に求めており、これが満たされないと真の安らぎや充足感がないと思われるからである。

この為に、いろいろなことが考えられるが、そのうち特に大事なことの一つはやはり家庭生活ではないだろうか。家庭生活は、それに向かって邁進しうるような明確な目標を立てることは出来ないし、又その機能を分析して何であるかを云うことも出来ない。従って一義的に規定したり、輪郭づけることは出来ないものである。そこから、今日家庭生活は、曖昧で、未分化なもののように

思われ、価値的に低く見られているのではないだろうか。しかし家庭生活が漠然として見えるのは、それが本来全人的な厚みと広がりを持っているということであり、そこにおいてまさに最も自由に、又深くい^いの^ちの交流があり、又それによってい^いの^ちが育っていくことが出来るということである。このかけがえのない意義を持った家庭生活は、種々の機能に分解するならば、その独自の実体を失わざるをえない。例えば、家庭における食事一つをとっても、それは単に栄養補給や嗜好性の満足に尽きないものであろう。それは、家族の間の心のつながりや交流、自然や社会あるいは超越的なものへの関わりやその学習を意味しており、食事をする者にとってまさに全人的意義を持っているのである³⁾。

このような輪郭や規定性を中心としないい^いの^ちのあり方を深め、広げていくことは、真の平和創造であると云ってよいであろう。それは、一見雑然として見えるが、しかし決して見飽きることのない雑木林の美しさを持っているとも云えよう。

3) 拙稿「子どもと食生活」(「学校経営」1984年9月号所収)参照。

Summary

Das Verständnis und die Diskriminierung des Menschen

Takashi Matsuda

Es ist sehr schwierig, oder fast unmöglich, einen Menschen als Ganzes zu verstehen; denn er hat ja zahlreiche unvorausehbare Möglichkeiten und unergründliche Innerlichkeiten, und kann sich außerdem immer verändern und wachsen. Man kann nur von einigen Seiten eines Menschen Kenntnis haben. Trotzdem glaubt man, einen Anderen im Ganzen verstehen zu können, oder sogar verstanden zu haben.

Mir scheint es sehr problematisch, daß man oft geneigt ist, solche teilweise Kenntnis für die totale zu halten und als solche zu fixieren. Denn aus dieser Neigung entsteht "die Diskriminierung des Menschen" als ein schwer zu lösendes Problem. Sie entsteht dadurch, daß man den eigentlich unvergleichbaren Menschen als Ganzes vergleicht, klassifiziert, ja genau genommen, irgendeine teilweise Schätzung für die totale hält. Also entsteht die Diskriminierung des Menschen aus falschen Erkenntnissen und egoistischen Gründen.

Aber es gibt Situationen, wo man zur Diskriminierung des anderen Menschen geneigt ist. Z. B., wenn ein Ziel zu erreichen für eine Gruppe sehr wichtig ist, wie im Krieg, so müssen ihre Mitglieder nach ihrer Tauglichkeit oder Untauglichkeit zur Erreichung des Zieles hoch- oder geringgeschätzt. Je endgültiger das Ziel ist, desto absoluter wird die Klassifizierung der Menschen in die tauglichen und untauglichen. Deswegen muß man sagen, daß die Diskriminierung des Menschen mit dem Krieg eng

zusammenhängt.

Zwar sieht unsere heutige Gesellschaft nicht immer so militärisch aus, aber darin ist die ökonomische Konkurrenz sehr hart. Das ökonomische Ziel, möglichst viele Waren möglichst effektiv zu produzieren, drückt auf unserem Leben. In unserer modernen industriellen Gesellschaft müssen die Menschen nach ihren Tauglichkeit oder Untauglichkeit zum ökonomischen Erfolg klassifiziert werden. Nicht nur dort, sondern auch in der Schule als Vorstufe.

In der ökonomischen Konkurrenz wie im Krieg müssen alle scharf umrissen und eindeutig definiert werden. Die scharfe Umreißung und die eindeutige Bestimmung des Menschen führt zur Konkurrenz, Verwaltung und Manipulation desselben. Dagen braucht man im Frieden nicht immer solche Bestimmung. Vielmehr ist es sehr bedeutsam, daß man im Frieden ohne solche Definition und Differenzierung des Menschen zusammenleben kann; denn nur dabei kann jeder Mensch als unteilbares Ganzes akzeptiert und respektiert werden und zahlreiche Möglichkeiten in jedem Menschen lassen sich zu ihren eigentlichen Gestalten verwirklichen.

Es scheint mir heutzutage sehr wichtig und unerlässlich, einen Menschen als unübersehbares Ganzes mit Vertrauen zu akzeptieren und zu respektieren, wie es gerade im eigentlichen Dialog geschieht. Die Verwirklichung und Entwicklung des Friedens ist also mit der Emanzipation untrennbar verbunden.